
僕たち中2病！！

泰 - やすし -

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たち中2病！！

【Nコード】

N2425K

【作者名】

泰・やすし・

【あらすじ】

今の若者は、現実と空想の区別もつかず、リアルの世界でとてつもない犯罪を犯す人が増えている。犯罪を、ゲームだと思っている人が増えている。そんな彼らの心境は、どうなっているのか……。

え？いやいや、こんな暗い話ではありませんよ？
こんな真面目ではありませんよ！？

とにかく！今増加している中2病にかかっている人たちの言動を、
徹底的に解説（？）していきましょー！！

僕たち中2病?!

「今日は中2病についてお話ししましょう。」

(中2病・・・?)

生徒一同の心の中

中2病(ちゅうにびょう)とは、

思春期の少年少女にありがちな、「微妙にずれた自意識過剰やコンプレックス」、それから転じて起こる数々の「日本の教育制度における中学2年生(14歳、ティーンエイジャー)位の年代にありがちな言動」を小児病に引っ掛けて揶揄したもの。

である。(ウィキペディアより)

「たとえば小川さん!」

先生が小川さんと呼んだ女の子を指さす

「あなたの頭の上についているアホ毛^レ!

それは『他人とは違う容姿をすることで無意味なキャラ作りをし

ている』のではないですか!？」

小川さんの頭のとっぺんには、一本の髪の毛(のようにみえる髪の毛の束)が立っていた。

小川さん

「でもこれは、クセツ毛ですよ。」小川さんがアホ毛をさわる。
「ふむ、天パというわけですか。だがしかし、二次元の世界では充分キアラ濃い設定ですよ。」

「先生、一体中2病とは、何なんですか？」
別の女子生徒が手を挙げながら立ち上がった。

「中2病とは、ハタからみてイタイ言動をしている人のことですよ、加藤さん。」

小川さんの場合、アホ毛を立てることで自分のキアラも立てることが実にイタイタしいということです。」

「いえ、先生、これはクセツ毛なんですよ。立てようと思って立てるわけじゃないんですよ。」

小川さんがアホ毛をみよんみよんさわりながら言う。

「ほかにも、」
「ってガキのすることだよなあ。」とか言い出したり、お母さんに対して激昂して『プライバシーを尊重してくれ』と言い出したり。『僕は僕で誰かじゃない』と言い出したりすることも中2病患者と言ってよいところでしょう。」

「……先生って、基本、人の話きかないよね。」
教室のすみの席に座っている女の子が、本を読みながらボソツと言

う。

「ちなみに、『中二病』は誤変換なんで、よろしくです!」

「とにかく」先生

先生が何も書かれていない黒板をバンバンたたく。

「上の文の他にまだまだたくさんありますが、周りから見ても恥ずかしい行動や格好をするのは君たち思春期にありがちですから、せいぜい、大人になって後悔しないように毎日気をつけて生活をするように!」

バンツバンツバンツバンツバンツバンツバンツバンツバンツバンツ

黒板たたきながら何か言ってる先生……………。

「でも先生。」

加藤さん

「『中二病』って言うくらいだから、それは中学2年のときにかかるとはならないのですか?」

「私たち、高校生ですよ。」

「いえ、『中二病』というのは名前だけであって、実際のところは、中2以下でも、また、大人になってもその症状を持っている人はいるのです。」

「ちなみに女の子は、万年『小6病』である。と言われてます。」

(へへ) そうなんだー。(生徒一同の心の中

「じゃあ、先生も、中2病ですねえ。」

「何を言っているんですか、小川さん。私はまっとうな生活を送り続けた、清純な日本男性ですよ。」

「たくさんの中2病患者を見てきた私が、中2病なわけないじゃないですか。」

「だって先生。」

小川さんの口の端が上がる。

「言っただじゃないですか。キャラ立てしてるのも『中2病』だって。」

先生のその格好。

眼鏡して

前髪で片目かくして

白衣着てるなんて

「凄いキャラじゃないですか。」

口は三日月の形のように笑っているのだが

大きく開かれた目は笑っていないかった。

「え、まっってください。あれ、この話ホラー？ホラーっぽくなっていないんですか?! ちょっと小川さん怖!! こんなくだらない話してるのになんで怖!?!」

「先生、認めてくださいよお。先生だって、中2病だということ・・・。」

「やめてくれ!! わ、私は、中2病なんかじゃ・・・。」

「という夢を見たので、今日は皆さんに『中2病』についてお話しようと思います。」

教卓に手を突いて前のめりになっている担任の先生（ ）

「先生。」

「なんですか、教室のすみの席に座っている女の子、川嶋さん。」

ちなみに彼女、小説家志望。

「上の文章、いろいろわけ分からないです。脈絡ないというか。何が伝えたかったのかとか……。」

「夢とは、そういうものです。どうしようもない展開になってしまった物語のオチをつけるためによく使われる表現、夢オチです。」

「あと、その夢みだからと言って、なんで私たちにまた『中2病』を教えようとするんですか。」

「私がいかに、『中2病』じゃないか。ということをお皆さんに知ってもらうためです！」

というわけで皆さん！

今から私が、中2病とは、どういうことか、じっくりゆっくり教えていきますから！」

カメラでもしかけてあるのか（いや、そもそも小説なんだからカメラなんてないのだが）先生がズームアップで映っている。

（ことを想像してください。）

「ちなみに

中2病を熱心に調べていたこの物語の作者も

中2病です!!！」

僕たち中2病?! (後書き)

途中から何が何だか分からない展開になっていき、ブラウザ閉じてしまおうと思ったでしょう。

(いや、最初から最後までわけわからない話でしたが……)

でもこんな話を最後まで見てくださり、ありがとうございました!!

更新は今後めっさ遅くなると思いますが、よろしくお願いします。

感想もらえると嬉しいです! (ある意味感想怖くて見れないかもしれません。ああ、苦情とか多そうだ。つまんなすぎて感想書いてもらえないのがオチだあああああっ!)

学校という場の

「学校という場は、中2病の群れです。」

「そもそも中2病の方たちは、『学校なんてダメ人間工場』と呼んでいる、もしくは思っています。」

「因数分解が何の役に立つんだよー。」

「ホントだよなー。」

どこかの男子のつぶやき

「高校生にもなってあんなこと言って……。」 加藤さん

「いえ、あれはただ、『数学や科学、その他もろもろの学校の教科の必要性を考えてる俺って哲学的じゃね?』とただ単に考えている人ぶりだけなのです。」

しかもそのことについてあまりナニも考えていないのです。」

「『物事を追及していく』と勘違いしている自分の姿に酔っている

「だけなのですね。」

小川さんがアホ毛を左右に振りながら、先生と加藤さんの目の前に現れる。

「そうですね、小川さん。あなたも中々、中2病のこと分かっているじゃないですか。」

あとちょっと社会の勉強しただけで

『アメリカは汚い』やらなんやら外国情勢やら環境を嫌悪したりしたがります。」

「中2病の人たちって勉強することに批判的なものね。」
加藤さんがあごに手を添えながらつぶやく。

「そういう感じ方もありますが、実際は

『学校という場に反抗していく不良魂的な』何かを持っている”設定”らしいのです。」

「不良的な自分をアピールしたいんだよね。」

小川さんがスカートを長くし、竹刀をもって、スケ番のコスプレをしていた。

「成程、気持ち的には学校にクーデターを起こそうとしているのですね。」

加藤さんがポンツと手を打つ。

「”気持ち的には”ですけどね。」 先生

「”気持ち的には”学校に自分の歴史を刻みたいと思っているんでしょうねえ。」 小川さん

「でもそれが、無理だから。」 加藤さん
「『因数分解が何の役に立つ?』で事を済ませるのです。」 先生

学ランを来て、胸からズボンのところまでサラシ巻いている小川さんの姿がそこにあった。

「私たちの年代の人たちは学校の先生とかに否定的な人が多いですよねえ。」

その姿はまさに『マンガによく出てくる不良』

「『先生に反抗する自分は不良で格好いい!』と。これはもう泥酔です。」

大体こういうかたも患者さんなのですが。

まあ、これも思春期の通り道と言いますか。

前回は言いましたが、自分が不良である キャラが立つ という風になりますので、高校生になったらもうそろそろやめにしませんか。 と先生は思います。

見えて悲しいです。」

「ドラマだとカッコいいんですけどねえ。」

「次元がちがうわよ!」

「あとドラマのヤンキーの人たちって『先公は汚ねえ』とか言いますよねえ。」

「ふむ。『先生』だけではなく、大人はみな、同じような奴だと感じてみたいですよ、現実問題。」

「『あんな大人だけにはなりたくねえよなあ!』と、言っているの聞いたことあります。」

「個性を出した大人になりたいということですよ。まあでも、その”個性”の出しすぎが痛々しいのですがね。」

先ほどの話から、彼らは”先生”についての批評は酷いです。」

「ホントですよ、学校先生を何だと……。」 加藤さん

「それ以前に、学校先生だけでなく、全体的な”勤労”を評価していないのです。」

「!? そんな?! 働くことを何だと……。」

「先生! 外に出てみましょう! きっともつと中2病さんたちの職業についての評価が聞けますよ!」

小川さんが大げさに手を挙げて、叫ぶ。

「職場見学ですね!!! いいでしょう、社会活動として、

行きましょう!」

学校という場の（後書き）

書きたいことって書くことすると難しいですね・・・

（ ; ; ; ; ）

あとあんまり登場人物の行動とか

誰が何を言っているのか

そついうのを書いていないので、もの凄く分かりづらいと思います
が、

なんとか想像して補ってください!!

職業いろいろ

「ここが『宙式平株式会社』です。」

おー。

別にこれと言って大きなビルではなかったのだが、一応、喚声をあげる生徒一同。

「でもさー。」

列の中からつぶやきが聞こえる。

「サラリーマンとか、会社の歯車だよなー。」

「評価いただきましたあー！」

小川さんが『中2病P』と書かれたぼっちボタン機を押す。

「何なんですか、これは」

先生がぼっちボタン機を指指しながら聞く。

「このぼっちボタンが押される度に、『中2病の評価ポイント』が加算されていくのです！」

ちなみにこんなことをすることに、意味はありません！」

「俺の父親、サラリーマンなんけどさあ。」

サラリーマンだけにはなりたくねえよなあ。」
またどこかから男子のつぶやきが聞こえてきた。

「出ました！これぞ中2病の評価です！」 先生

「はい！」 小川さん

ポチポチポチポチツと ボタンを押しまくる小川さん

「大体中2病というか、まあ学生くらいときは、”社員”といういかにも地味で普通な仕事に就きたいと思っている人はそういません。」

まあ、将来の目標がなくてサラでいいやー もしくは
現実をちゃんと見えるようになってしまった方は別ですが。」

ともかく、その度が越えたところに

『声優になりたい』やらなんたら本気で言うようになってしまったんですよ！」

「もう、先生、いいからなかに入りましょうよ！」

加藤さんが先生の熱狂解説に一度ピリオドをつける。

「そうですね、まあ、中でじっくりと教えればよいでしょう。」

こうして、先生を先頭として、1・Bのクラスの生徒たちは、会社の中へと入って行った。

ガッ っと自動ドアが開く。その先には一人の女性が立っていた。

「この方が、今日みなさんを案内してください、逢坂おおさかさんです。」

「よろしく願います。」

逢坂さんがお辞儀をする。肩でそろえられた髪がすべるように流れる。

「みなさん、宙式平社へようこそ。ここの会社は本の出版を専門とする……」

まあ、いわゆる、某出版社です。」

「これでもポイントつきますよ！」 先生

「某出版社に就きたい、と思いだす人もいるのではないでしょうか。この中に。実際私もそうですから。」

何やっているか分からない会社よりも、名前だけポピュラーな会社に勤めたがったり、

また、専門職につきたいなど考えてもいますね。

『普通な人になりたくない』 ですからね。」

「……それ、本気でなりたいと思っている人に失礼じゃないですか？」

「こんなときにまで本を読んでいるのですか！？川嶋さん！！」

確かに本気でなりたいと考えている方はいます。それを侮辱するような言い方をして申し訳ありませんでしたね。

まあ本当に才能があるなら、先ほど言った『声優』になれるでしょう。アイドルになったりするのだって、夢ではないでしょう。

しかし、私が言いたいのはいは！

妄想を人に話すのはやめていただきたい！ということですよ……！！」

作者の中学校の頃の話をししましょう。(現在高校1年生 3 / 6から)

作者も一時、声優さんになりたいと思っていました。そして、その作者の近くには声優に憧れる同年齢の子がいました。

はじめ、作者は純粹にその子を応援しました。しかし、

その子の家に行つて、とあるアニメのライブ(声優さんが集まるライブ)のDVDを見せてもらった、ある日のこと。

見ながらいきなり、その子が会話していた声優さんにツッコミを入れたのです。

作者は驚きました。その子は言っていました。

「私がこの場にいたら、こうやってツッコムね!」

その子は、自分が声優になったつもりで、ライブに自分がいるつもりで、DVDを見てツッコミを入れていたのでした。

静かに見ていた作者。しかしその隣にはずっとツッコミまくるその子……。

「こうして作者は、声優の道に冷めていったのです。今ではただの声優好きです」

「なんでそこで作者の話にするの!？」加藤さんがツッコミを入れた。

「みなさん、今話を聞いてどうですか!？なんかもうツライです。色々イタくて。作者もこれ書いてるとき、精神やら心とか色々苦しかったそうです!」

「作者が書いたとか言わないで!!嫌でも私たちが二次元だと認識しちゃう!!」

「そういえば、私の住んでいた地域のことなんです。」「不意に逢坂さんが話に参加してきた。

「私は大阪府出身なのですが、私の通っていた学校のクラスの3分

真剣に将来のことを考えている方もいらっしゃるでしょうに。

本当にすみませんでした。

しかし、あんな酷い扱いで物事言った作者は実は、

『努力したら必ず報われる』と信じています。

声優だろうがモデルだろうが芸人だろうがマンガ家だろうが小説家だろうが、有名になるのが難しい職業でも、本気でなりたいたい方なら絶対になれると思います。

……と、作者は言っています。

コホンッ

さあ。話を変えて、

次へ行ってみましょう!」

職業いろいろ(後書き)

いつもどおりグダグダですね・・・；

私は本当に、努力している人は応援しますよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2425k/>

僕たち中2病！！

2010年10月9日19時46分発行